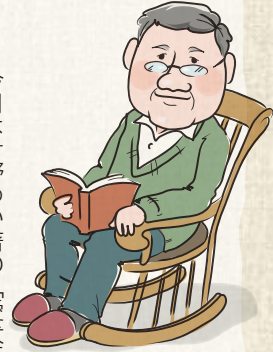


# 「愛犬王 平岩米吉伝」



著者：片野ゆか  
発行：小学館  
ISBN：9784093897037  
2006年04月20日発売 ￥1,680



今月は片野ゆか著の「愛犬王 平岩米吉伝」を紹介致します。平岩米吉は明治30年に江戸時代から続く裕福な竹間屋に生まれ、10歳頃には家業の主要業務を完璧にこなした神童と呼ばれました。

米吉は何事にも熱中するタイプで、米吉の父親の甚助は「商売は継がなくていい。なんでも好きなことをやりなさい」と言い遺して大正元年に亡くなりました。

大正14年米吉27歳の時、20歳の佐興子を妻に迎へ、昭和2年に長女翌年に長男を授かります。この時から米吉は持ち前の研究熱心さを発揮し、我が子の成長の過程を克明に記した「育児日記」を付け始めるのです。

昭和3年には「日本犬保存会」の設立に参加し動物方面の活動もし始め、昭和4年に現在の目黒区自由が丘に「白日荘」と名付けた屋敷を築きます。まもなくして千坪以上もある土地に頑丈な金網を張り巡らし、生き物の生態をそのまま観察するため動物と一緒に生活を始めました。

そして昭和5年米吉が33歳の時、「犬科生態研究所」を設立し犬科動物の研究生活を本格的にスタートさせました。白日荘で飼われていたのは犬はもちろんのこと、狐・狸・狼・ハイエナやジャッカルなどの犬科の野生動物の他にも朝鮮山猫やジャコウネコのような猫科の動物も飼われていました。

生後3〜5カ月の朝鮮・満州・蒙古産の狼6頭を白日荘に迎へ入れ、平岩家の家族と暮らし始めたのもこの時期です。米吉はシェパードの愛犬「チム」を連れて銀座のデパートによく出かけていたのですが、狼を同行させてもハイヤーの運転手はいつもの犬と思ひ込んでいたようですし、繁華街を散歩していても誰も気に留める人はいなかったということです。

妻の佐興子は結婚当初、動物たちには近づくとこさえてできませんでしたが、米吉が胃潰瘍で吐血した時には狼を抱き上げて犬舎に戻すことさえも出来るようになっていました。こうして佐興子は映画や写真の撮影など米吉の研究成果を支えて行くようになったのです。

昭和9年米吉は雑誌「動物文学」を創刊、「日本野鳥の会」を設立した中西悟堂も巻頭を飾っています。

生涯、多数の書物を世に出した米吉ですがその人物交流は、南方熊楠・柳田國男・折口信夫・徳富蘇峰・北原白秋・室生犀星など錚々たるメンバーでした。

彼らに共通して言えることは、米吉も含めて学歴に頼ることなく独自の方法で学問の道を探究した方々であったということです。残念ながら紙面が尽きましたので以下次号に：：